九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マルクス主義組織論序説

嶋崎, 譲
九州大学法学部

https://doi.org/10.15017/1420

出版情報：法政研究. 28 (3), pp.25-52, 1962-02-28. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

マルクス主義組織論序説

嶋崎　譲

まえがき

今日、史的唯物論が現代政治における政治現象把握の方法としてその有効性をもちうるかどうか問題視されている。ソ同盟共産党二〇回大会以降、直接ないし間接の、史的唯物論への批判がそれである。ここでは、現代政治における組織の問題をめぐっての丸山真男、石田雄の処説にかぎり、彼らの「史的唯物論＝マルクス主義」への批判に答えて、マルクス主義組織論の前提を明らかにしようと思う。

丸山氏の処説によれば、マルクス主義者の思考方法には、次の四つの自家中毒的症状とでも称しうる病理現象があるとされる。「遡及法的論理」「本質顕現的思考」「人間の意識および行動の非合理的面にたいする理論的嫌悪」「基底体制還元主義的思考」などがそれである。これら四つの、マルクス主義者ないし共産主義者にあらわれる定型化された思考と行動の様式は、相互に内部的に関連している。「基底体制還元主義」とは、上部構造の問題を下部構造の問題に帰着させる発想であり、下部構造の客観的法則性にすべてを従属させる発想であるから、それは、同時に、人間意識の非合理的な側面を捨象する思考となる。上部構造が下部構造に規定されるという論理は、上部構造を現象としてとらえ、下部構造をその本質とみる本質顕現的思考ともなる。これらの発想は、歴史の事象を客観的な法則性に則して遡及法的に解釈する思考の方法ともなるということができる。丸山氏は、スターリン批判をめぐってあらわれ

た各国共産党の「スターリン批判とそのうけとめ方」のうちに、前述の四つのマルクス主義者の思考傾向を浮きぼりにしようとする。丸山氏が『スターリン批判における政治の論理』において、組織論の問題に関連してとりあげた、マルクス主義者の「基底体制還元主義」的思考についての処説を手掛りに、マルクス主義組織論の方法論上の前提を明らかにしょう。

「個人崇拝」とそれに関連してだされたスターリン独裁の諸側面は、政治心理の次元で重要な問題を提起しているばかりでなく、それとならぶ、組織の問題を登場させずにはおかない、と前置きして、丸山氏は、イタリー共産党のトリアッティとソ同盟共産党との論争が問題の所在を明るみにしていることを示そうとする。

ソ同盟共産党報告（一九五六年六月三十日）では、スターリン独裁の問題を「個人崇拝」の問題に解消する論法がとられた。ここでは、個人崇拝を生みだした原因として、(1)ソ連で社会主義建設が行われた客観的な歴史的条件と(2)スターリンの個人的資質と関連した若干の主観的要因という二つの側面を上げている。このように、ソ連共産党中央委は、スターリン独裁の問題を、個人崇拝にその原因のすべてを帰すという見解をとったが、この見解を非マルクス主義的と批判したのは、トリアッティであった。彼は、ソ連中央委のいう、「歴史的客観的条件」とスターリンの個人的な「主観的な要因」との二つの要因がどのような媒介要因によって結びつくかという点を考察して、媒介要因としての組織の問題を提唱した。トリアッティは、スターリン独裁の問題を、組織問題にまでほり下げて、ソヴェトの経済的、政治的生活における官僚機構の比重の増大にふれ、「民主的制度に対する有害な諸制限や官僚的組織形態が漸次、優位を占めたことは党にその萌芽をもつ」と指摘し、害悪が制度全体に影響を及ぼしたことについて、立入った分析が必要であることを提唱した。トリアッティの問題提起の意義は、丸山氏によれば、「パーソナリティーと状況との関連とか、指導と被指導との機能的な相互作用とか、公式（フォーマル）な組織内部における非公式（インフォーマル）グループの意義とかいっ

た政治上の核心的な諸課題」を示そうとしていることにある。「この問題が理論的にとり上げられない限り、個人崇拝に限らず、重大な政治的事象は、一方では巨視的な客観状勢論ないしは『体制』論と、他方では、指導者の先天的資質の二つの方向に解消されてしまう。」

ところが、トリアッティを反駁したソ連共産党の決議は、一方では、個人崇拝が「社会主義的民主主義の発展」を阻害したこと、複雑な内外状勢のため「鉄の規律、ゆるぎなき警戒心の強化や峻厳きわまる指導の中央集権化の結果若干の民主主義的形式の発展に悪影響を与え」たことを認めている。ここで、承認したことを、組織過程の問題として追及すれば、トリアッティへの回答となったかも知れない。しかし、他方で決議は、「トリアッティがソヴェト社会が〃若干の改革〃に当面していはしないか、という問題を提起していることには同意できない」といって、個人崇拝が社会制度の本質に「無縁」であることを強調し、その根拠として、社会制度の本質を決定するものは生産様式のあり方、生産手段の所在だとマルクス主義のイ、ロ、ハを講義している。この後者の発想が問題である。「民主主義的形式」の発展や「社会主義的民主主義」の発展の阻害が、党・労働組合・国家機関の組織化活動の過程と無関係に真空で行われるわけはなく、指導における過度の「中央集権化」は機構化を伴わずにおかないにも拘らず、制度や組織を問題にすると、すぐさま、基底の社会主義の本質が疑われたかのように、反応を占す発想の典型である。「一枚岩的」観念の典型的表現である。

この「一枚岩的」発想の底には、マルクス主義者の思考を深く規定するところの、すべての問題を基底体制へ還元させ一元化する傾向がある。個別的な組織体の次元の問題が、究極的には政治的上部構造全体の問題となり、更に、「本質的」には下部構造の問題に帰着させられる。「基底体制への還元」は、このプロセスを逆にすれば、「本質顕現的思考」となる。この思考の方法は、歴史過程の観方のなかにすべりこむと、いわば「歴史的単線主義」として発

現する。歴史観察における複線あるいは複々線の架設を止むをえない場合にしか客認せず、できるだけ、「本質」としての単線（生産様式・生産関係・階級）に流れこませようとする。そうして、そこには複線あるいは複々線でとらえられるような対象は究極的もしくは本質的には単線から派生した現象であり、またその領域に登場する範疇や概念は基礎範疇に比べて二次的な意味―あるいはより低次の科学性しか持たないという想定が潜んでいる。機能的に見れば、階級を縦断している社会集団の同時的＝多層的性格は無視され、「本質的」に規定された階級論で事態がわり切られる傾向となる。政治の次元の論理は、経済の次元の論理に解消される。マルクス主義者の「基底体制還元主義」の傾向は、大衆の政治意識とその組織化過程を論ずる場合には、「本質顕現的思考」と結びついて、「次第に革命化する」という長期観測のために、経済状況や政治状況の転変に応じて、大衆の意識と行動が描く高潮と沈滞の波動が十分に追跡されない。プロレタリアートが「本質的に革命的であり、しかも共産党がつねに革命の前衛であるならば、具体的革命の失敗は共産党以外の社会民主主義指導者の裏切りによってしか説明できなくなるのも道理である。（丸山真男『現代政治の思想と行動』下巻三二八―三五一頁）

ながながと丸山氏の処説を紹介したが、要するに、マルクス主義者の「基底体制還元主義」の思考方法がマルクス主義の思考に深く規定されていることをするどく衝いている点を示したかったためである。丸山氏のマルクス主義的思考方法への批判は、政治の過程的＝状況の論理を重要視した A・F・ベントレーの「政治過程論 The Process of Government」（一九〇八年）が問題提起して以来、ずっとプラグマチズムの理論からなされたマルクス主義への批判に通ずるものがある。

石田雄氏の『現代組織論』も、丸山氏のマルクス主義への批判のあとをうけて、組織の問題を真正面に議論した大作であるということができる。（拙稿「石田雄著『現代組織論』を読んで」『思想』一九六二年十月号）彼も、『現代組織

論』のなかで、マルクス主義階級理論では、政治過程論の問題性や組織論の現代的な問題性を意識することはできないとして、次のように批判している。「マルクスにおける階級は、市民社会における Public とは構成原理の点で全く異るが、客観的な利益要求と観念形態とは一致し、それゆえに象徴過程と組織過程とは、幸福な平行関係を示している点で、mass の問題は意識にのぼらない。」（石田、二〇頁）つまり、「基底体制還元主義」的思考によって、「マス」の問題を「階級」に還元する思考方法のもとでは、現代社会の組織過程の問題性を認識することはできない。このように、マルクス段階では、現代組織論の問題が意識にのぼらないが、レーニン、ルカーチの段階では事情は異るとして、石田氏は次のようにいっている。「〃人民〃という雑炊のなかからプロレタリアートを理論的に抜きとることは、決してまさに、おのづから、それとともにその独立性、その指導的役割の認識と承認とをもたらすものではない（G. Lukács, Lenin; Berlin; Der Marik Verlag. 1924. SS. 16—17）のみならず、プロレタリアートの事実的な心理学的な意識状態を、プロレタリアートの階級意識と混同することこそ日和見主義であるとするG・ルカーチの所説（G. Lukács, Geschichte und Klassenbewusstsein. Berlin; Der Marik Verlag. 1923. S. 86）に見るように、即自的存在としての階級はそのまま階級意識の担手でなく、それ故に〃意識的前衛の組識上の独立〃とその指導が、革命運動にとって不可欠の要素とされる。（a. a. O., S. 329）…この段階において、認識の手段（いわゆる symbolic use）としての〃階級〃と情動的用法（emotive use）としての〃操作〃とが区別され、ここに組織論が意識に上るようになる。」（石田、二〇—二一頁）氏はマルクス段階で意識にのぼらなかった組織化過程の問題が、レーニンの段階において、大衆組織の心理と論理の問題として提起されるにいたったことを強調しているのである。

マルクス主義組織論の問題の所在が漸くにして明らかとなってきた。丸山氏は、マルクス主義者に深くねざす「基底体制還元主義」的思考では政治の論理を把握することができないというが、果して、マルクス主義がそのような固

有の思考方法をもっているかどうか。さらに、丸山氏の所説を前提とした石田氏によれば、マルクス段階では、組織論の課題は意識されず、それはレーニン、ルカーチ段階ではじめて組織論として自覚されるようになったというが、果してそうか。これらマルクスからレーニンの段階への移行のなかで、マルクス主義組織論の発展をどう理解するか。これらの検討がマルクス主義組織論の方法を明らかにする前提であるということである。つまり、基底体制還元主義的な本質規定論＝客観的発展の法則論すなわち理論と、理論に従っての目的意識的な実践との媒介過程として、組織の問題を自覚することが、マルクス主義組織論の課題であるということである。そこで、初期マルクスにおける史的唯物論の成立過程のあとをおって、マルクスが追及した思想方法が組織論の前提であることを明らかにすることによって、丸山、石田両氏の批判に答えることにしょう。

一　マルクス主義組織論序説

なるほど、丸山氏も指摘されるような「基底体制還元」的思考は、史的唯物論者にとって、その方法が史的唯物論であるだけに、危険な思考上の陥穽であることはたしかである。しかし危険性があることと、史的唯物論の方法がマルクス主義者をしてその陥穽に落ちこませたこととを混同してはならない。丸山氏によって批判されたマルクス主義者のその思考は、マルクスが思索しつづけた過程を見ずに、思索の結果、完式化された史的唯物論の図式＝理論を物神化したことに基因している。

そこで、当面、われわれは、マルクス主義に固有な「基底体制還元」的思考が、組織論、政治過程論の問題性を意識しえないという批判に答えて、マルクスが史的唯物論の定式を完成させるにいたった思想のあとを辿ろう。

マルクス・エンゲルスが史的唯物論を体系化するにいたったのは、周知のように一八四五―六年の『ドイツ・イデ

オロギー』であるといわれている。『ドイツ・イデオロギー』において、マルクスは、もはや人間世界の統一的な全体を、生産力、分業、生産諸関係などの概念で正確に表現しはじめている。これら史的唯物論における諸概念は、一八四三年にはじまるヘーゲル法哲学の批判の過程で、マルクスがヘーゲルの「疎外概念」を国民経済学に適用してゆくなかで形成されたものである。マルクスは、ヘーゲル哲学の「自己疎外」Selbstentfremdungの論理構造を社会の客観的諸過程に適用しながら、その諸過程を史的唯物論の諸概念によって敍述しはじめたともいうことができる。かくてマルクスが『資本論』で到達した、自己疎外のブルジョア的な客観的構造としての、「物神性」Fetischismusの発見の端初が与えられたのである。

マルクスが初期の著作で追及したことは『ドイツ・イデオロギー』の次の言葉のうちに示されている。「分業に包摂されない個人を哲学者たちは、『人間』という名をつけて理想のようなものと考えた。そしてわれわれによって展開された全過程を『人間』の発展過程として把握した。その結果、各歴史的段階における個人が『人間』とすりかえられ、しかも、この『人間』が歴史の推進力なりと敍述された。したがって、全過程が『人間』の自己疎外の過程として把握された。……こうして最初から現実的諸条件を捨象する顚倒によれば、歴史全体を意識の発展過程に転化してしまうことが可能であった訳である。」（Marx/Engels, Die Deutsche Ideologie, Bücherei des Marxismus-Leninismus, Dietz Verlag. Berlin. 1953. S. 69 唯物論研究会訳、ナウカ版第一分冊、七一頁、以下原文は『原』と称す）

すなわちマルクスがヘーゲル、フォイエルバッハを批判的に克服しようとした方法は、彼らが歴史の過程を抽象的な『人間』の自己疎外の過程として把握していることにたいする批判に目をむけたことにあった。マルクスにとっての出発点は、人間を「抽象的人間」としてでなく、「歴史的、社会的に行動する人間」としてとらえることであった。このことは「フォイエルバッハの欠陥は、対象、現実性、感性が、客体または直感の形式のもとにのみとらえ

られて、感性的（物質的）な人間的活動すなわち実践としてとらえられず、主体的にとらえなかったことにある」（Marx/Engels Werke, Bd. Ⅲ, Dietz Verlag, S. 533）という一八四五年の『フォイエルバッハに関するテーゼ』における批判に示されているとおりである。そして、生きた行動する人間の自己疎外の基本構造は、国家・法・政治の世界よりも、さらにその土台となる経済構造のうちに解明される根拠が与えられるとして、マルクスは、英国古典経済学の研究を開始し、それと同時に、フォイエルバッハをこえた人間の行動的側面を「労働」としてとらえなおすために、ヘーゲルの『精神現象論』を検討することになった。この研究の業蹟が、一八四四年の『経済学・哲学に関する手稿』（Ökonomisch-philosophische Manuskripte (1844). Marx/Engels Gesamtausgabe, I Abteilung Bd. Ⅲ, Herausg. von V. Adoratsky. Berlin 1932 以下『原』と称す）となったのである。

マルクスの思考の発展は、市民社会から、法・国家・政治の分析を行ったのでなく、法・国家・政治の分析から経済の分析に発展していったということができる。すなわちマルクスの思考の発展は、フォイエルバッハによってなされた宗教の人間学的批判を出発点として、フォイエルバッハ流の自然的人間から、マルクス流の社会的人間へと人間概念を転回させることを通じて、社会的・政治的現実を批判の対象として設定し、政治的世界の基礎を経済に求めようとする思想形成の過程をとったのである。政治的現実の変革の客観的可能性を提示するための努力の過程である。したがって、史的唯物論の成立過程からみれば、史的唯物論が「基底体制還元主義」的思考を本来的にもったものであるなどという批判はあたらない。政治を経済に還元するのでなく、政治的世界の発展の客観性を保障するかぎりでの経済の分析なのである。

そこで、ヘーゲルの自己疎外論を国民経済学に適用しながら、プロレタリアートの解放の客観性を明らかにしようとしたマルクスの思索の過程を、『経済学・哲学の手稿』において追及し、マルクスの自己疎外論が史的唯物論の

成立にどう移行するかの過程を辿ろう。そうすれば、マルクスの史的唯物論への道は、政治の世界、政治的変革における組織の論理を解明する方法をするどく示唆していることを知るであろう。

〔I〕 自己疎外論と史的唯物論

『経済学・哲学の手稿』においてなしとげようとしたことは、一八四三年の『ヘーゲル国法論批判』以来、追及してきたものに解決を与えることであった。一八四三年におけるマルクスの思想的発展における到達点と課題を次のようにいっている。「人間の自己疎外の神聖な姿が仮面をはがれたのちには、まず、神聖ならざる姿における自己疎外の仮面をはぐことが、歴史につかえる哲学の任務である。」（邦訳マル・エン選集、大月書店版、補四巻一七五頁）と。

（一）拙稿「マルクス・エンゲルスにおける国家論の形成」（『政治学講座』Ⅳ理論社刊参照。）

マルクスは、一八四三年にヘーゲル法哲学の批判を通じて、国家・法を「神聖ならざる自己疎外」と規定し、フォイエルバッハが「神聖なる自己疎外」として、国家・法の批判にとりかかったものをうけつぎ、これらの神・国家・法などの宗教的・政治的自己疎外という観念的自己疎外の現実的基礎の解明が課題であることを宣言しているのである。すなわち観念的自己疎外から、現実的な自己疎外の正体を明らかにすることである。現実的自己疎外の解明こそが、生産における労働の対象化をとり扱う経済学の批判・検討であった。『手稿』はこの課題に答えたものであった。したがって、『手稿』の課題は、観念的自己疎外＝上部構造が、現実的な自己疎外＝土台に根底をもっているということを明らかにするために、現実的自己疎外の構造を示すことであった。そして、プロレタリアートの解放（＝現実的自己疎外からの解放）が、国家・法などによる人間の観念的自己疎外からの解放であるという命題に、歴史的客観性を与えることであった。この関係を明らかにするならば、政治の世界における組織過程の問題を追及する方法も示されるであろう。

マルクスが「神聖ならざる自己疎外」の分析といったことの意味は、資本主義的経済構造を解剖することであった。『手稿』において、マルクスは、国民経済学の批判を通じて、私有財産を「疎外された労働」として分析した。そして、人間の自己疎外の物質的・経済的基礎である私有財産の揚棄が、人間解放、労働者の解放である点を示すことに成功している。

マルクスが『手稿』において用いている「自己疎外」とは、ヘーゲルの疎外論を継承し、本来の自分という人間主体を、その対象化されたもの、すなわち客体に奪いとられ、客体が主体だとされてしもうことを指している。自分の主体性を、自分が対象化したものに譲り渡して、そのものに従属させてしもうことである。

人間労働は社会の存続する限り、これを可能にする根本的な条件である。社会が必要とし、人間が必要とする生産物すなわち富は、一般に常に人間の労働の生産物である。しかるに、人間が自己の労働を対象化して、生産物に自己を客体化したとき、生産物の運動が、生産者である人間に支配的な力となってあらわれ、また、人間の社会関係が労働生産物の社会関係としてあらわれ、それが人間を支配するようになる。人間の作りだした社会関係が、人生の彼方にある、自然的力という性質をもってあらわれるようになる。人間の現実的自己疎外の構造とはこの関係のことである。それは、労働生産物が商品形態をとったことに基因している。マルクスは、労働生産物の商品形態に固有な、この自己疎外の性質を「物神性」と称したのである。マルクスが『資本論』において展開した、「物神性」の問題—人間の自己疎外のブルジョア社会における構造—が、マルクスの思想方法の核心であるとするならば、「物神性」の発見の思想方法は、「疎外された労働」として、『手稿』のなかで展開されたものを解明すればよい。

マルクスは、『手稿』で、資本主義的経済構造の基礎を説明するために、「労働」に着目し、労働者が必然的に窮乏化する状態におかれていることを国民経済学的な事実から出発して述べる。

「労働者は、彼が富を多く生産すればするほど、彼の生産の力と量が増大すればするほど、それだけますますまずしくなる。事物世界の価値増大に直接に比例して、人間世界の価値低落が増大する。労働はたんに商品を生産するばかりでない。それは商品としての自分自身および労働者を生産する。」（邦訳マル・エン選集、大月書店版、補四巻二九九頁、『原』八二―八三頁）

「この事実は、労働が生産するもの、労働の生産物が、疎遠な存在として、生産から独立した力として、労働に対抗することを表現するものに他ならない。労働の生産物とは、対象において固定された物象的ならしめられた労働であり、それは労働の対象化である。」（同書、同頁、『原』八三頁）

マルクスは、ここで、労働者が自己に対立して作りだす労働の対象化された世界がますます強大になれば、労働者自身がますます貧しくなるとのべ、それは恰も、人間が神に使えることが多ければ多いほど、彼が自分自身のうちに保持するものがますます貧しくなるのと同様であると語り、窮乏化法則を直感的に説明している。なぜそうなるか。「疎外され、外化された労働は、他人に対する労働者の関係を、その疎外された性格から作りだされるからである。すなわち労働者は疎外された労働によって、疎外された労働の外にある人と労働との関係をつくり出すからである。」（同書、三一二頁、『原』九一頁）その関係とは、労働の対象化されたものが、だれにぞくするかということに示される。疎外されたものは誰に属するか。神にか。そうではない。労働者以外の他の人間にである。なぜなら、人間に対して現実的に対立しているものはただ人間だけであるからとして、労働者と資本家との関係を暗示している。しかし、ここでは、いまだ私有財産の秘密は経済学的にとかれていない。

マルクスは、『手稿』で労働の疎外の事実を立ち入って分析している。

㈠労働者の労働生産物による疎外。これはいままでのべたように、労働生産物が、疎遠な存在として、生産から独

立した力として、労働に対抗する。すなわち、労働者が自己の労働を対象化した過程で、対象化物が労働者を支配するという自己疎外の側面である。

㈡労働者からの労働の疎外。㈠の側面が労働者の疎外を、その労働の生産物に対する関係から見たものであるとすれば、このような結果における疎外だけでなく生産の行為においても、生産活動においても、疎外はあらわれる。生産物が労働の外在化であるとするならば、生産そのものは外在化の活動であり、活動の外在化である。すなわち「労働は労働者にとって外的である」という意味で、労働者の労働は疎外された労働である。なぜなら「労働者の労働は自発的ではなく強いられたものであり、強制労働」であるからである。「労働は欲求をみたすためでなく、労働以外の欲求をみたす手段にすぎない」からである。「人間がそこで自分を外在化する労働は、自己犠牲の、苦痛の労働である。」なぜなら「労働は他人の所有に帰し、労働は労働者自身の喪失である」からである。

㈢労働者からの類的疎外。㈠㈡から、疎外された労働の第三の規定をみる。「類的存在 Gattungswesen」という概念は、マルクスがフォイエルバッハから受けついだ概念であるが、その意味するものは、人間は自然存在であると同時に根源的に共同性をもった存在であるということである。したがって、類的存在とは、結局根源的な共同体における有機的個人としての人間であることを意味している。労働者の類的疎外とは、第一には、類的生活と個人的生活とを疎外し、第二には、それは抽象における個人生活を、同じく、抽象的な疎外された形態での類的生活の目的にしたがわさせてしまうことである。共同性のうちに個人生活を疎外する過程である。抽象的な類的生活が、個人の生活を支配する形での自己疎外である。（同書、三〇一頁―三〇六頁、『原』八四―八八頁）

われわれは、これら三つの自己疎外の諸側面を、労働者の側からだけ考察してきたが、非労働者の側からも考察しなければならない、としてマルクスは、次のように問う。「もしも、労働の生産物が私にたいして、よそよそしく、

疎遠な力として私に対立するならば、そのときにはこの生産物はだれにぞくするのか？もしも、私自身の行為が私にぞくさず、一個の疎遠な強制的な行為であるならば、そのときの行為は誰にぞくするのか？」と。そして答えて曰く

「もしも労働の生産物が労働者に属さず、疎遠な力が、彼に対立しているとすれば、このことはただ、生産物が労働者以外の他人にぞくするということによってのみ可能である。もしも、彼の行為が苦悩であるとするならば、彼の行為は他の人間にとって、たのしみであり、他の人間の生のよろこびでなければならない。自分自身にたいする人間の関係は、彼にとって、他の人間にたいする彼の関係をとおしてはじめて対象的、現実的であるという命題を想起せよ。だから、もしも、人間が彼の労働の生産物、対象化された彼の労働にたいして、疎遠な、敵対的な、強力な、彼から独立した対象として関係するならば、彼はこの生産物に対して、なんらかの他の、彼にとって、疎遠な、敵対的な、彼から独立した人間が、この対象の支配者である。もしも、彼が彼自身の行為にたいして不自由なものとして関係するならば、彼はこの行為にたいして、何らかの他の人間に奉仕した、その支配者とその強制とその桎梏のもとでの行為として関係するわけである。」（同書、三一一頁、『原』九〇頁）

「こうして疎外された、外在化された労働によって、労働者は、労働に縁のない、労働の外部にたつ人間の、この労働にたいする関係をうみだす。労働に対する労働者の関係は、労働に対する資本家の、またふつうに雇主と名づけられている人の関係をうみだす。それだから、私有財産は、疎外された労働の、自然および自分自身にたいする労働者の外的関係の産物であり、成果であって、その必然的帰結なのである。したがって、私有財産は、外在化された労働、すなわち外在化された人間、疎外された労働、疎外された生活、疎外された人間という概念の分析をつうじてあきらかとなる。」（同書、三一二頁、『原』九一頁）

したがって「私有財産にたいする疎外された労働の関係から、さらにあきらかになるのは、私有財産等々から

の、隷属からの社会の解放は、労働者の解放という政治的なかたちでいいあらわされるということである。こういったからとて、労働者の解放だけしか問題にならないというのではない。労働者の解放のなかには、普遍人間的解放がふくまれているからである。しかし、普遍人間的解放が労働者の解放のなかにふくまれているというのは、生産に対する労働者の関係のなかにいっさいの人間的隷属がふくまれており、すべての隷属的諸関係は、たんにその関係の変容であり帰結であるにすぎないからである。」（同書、三一四頁、『原』九二―九三頁）

以上のように、マルクスは、疎外された労働の事実の分析から、労働が疎外される理由を、労働の対象化されたものが私有財産に転化し、私有財産の支配が人間の自己疎外＝労働の疎外の根拠であることにみたが、これも事実として分析しただけである。人間が、自己の労働を対象化したとき、対象化したものが人間を支配するという自己疎外の構造は、私有財産制＝賃労働制の秘密にあることを事実として分析したのである。私有財産の揚棄を、労働者の解放、人間の自己疎外の解放とむすびつける共産主義の思想をここで宣言した。このような説明は、いまだ抽象的であるが、外化せる労働すなわち商品となった労働の性質と結びつけて、資本の成立を解こうとする思索の過程は、後年の『資本論』の先駆である。すなわち、労働の客体化から、資本や私有財産そのものも、人間関係の物化に他ならないとする思想は、後年の「物神性」への道に通ずるものであるといえる。

労働の疎外ないし外化を事実として分析してきたマルクスは、さらに次の段階へと思索を深めねばならなかった。それは「どのようにして人間は、彼の労働を外在化させ疎外するようになるのか？、どのようにしてこの疎外が人間的発展の本質にもとづいているのか？」（同書、三一五頁、『原』九三頁）である。その解答は、私有財産の問題として把握しつつあったが、いまやマルクスにとっては、「私有財産の起源という問題を、人間の発展過程にとっての外在化された労働の関係という問題に転化す」（同書、三一五頁、『原』九三頁）ることが迫られている。しかし、「私有

財産の起源」の説明を、「疎外された労働」と関連づけて説明するためには、『手稿』を貫いている類的存在としての共同体を前提としては、どうしても解明することができない。なぜなら、有機的な共同体が、全く個人と全体との分裂なしに、共同体構成員の使用価値を作り出すような、そのような活動としての労働を基礎とし、その労働生産物の社会関係であるかぎり、そのうちに疎外へ転化する契機は生れないからである。原始共同体の単純協業による労働は、共同体の成員の使用価値としての生産物の生産であるかぎり、疎外に発展する契機は生れないという意味である。労働が疎外される端初は、使用価値としての生産物の社会的な在り方が転化することを必要とする。具体的には、それらが、互に交換されて商品という形態をおびることが必要なのである。共同体と共同体とが、個と個の関係となるような状態が前提であり、同時に、共同体内における成員が個として社会と対立、分裂することに対応しなければならない。結論を急げば、分業の発展と階級社会への移行が前提とならねばならない。

かくして、マルクスを阻んでいた思索上の混迷の所在が明白となった。フォイエルバッハ的な人間主義＝自然主義を放棄して、疎外の現実を、必然性として解明しうる新たな範疇を必要としたのである。ここにおいて、マルクスは、哲学的良心を捨てて、史的唯物論の確立へと道を急ぐことになるのである。それは、『手稿』における「類的存在としての共同体」から近代にいたるまでの経済構造の発展が、社会の「現実的な土台」における生産力と生産関係の矛盾によって行われるという、歴史的必然論の展開となるのである。つまり、生産力と生産関係の矛盾という概念なしには、疎外された労働の起源はもはや説明できないからである。かくして『ドイツ・イデオロギー』で展開され、のちに『経済学批判の序言』で一般化された、有名な史的唯物論の定式となる。『ドイツ・イデオロギー』以後のマルクスの著作からは、自己疎外という概念が消え、史的唯物論の諸概念で、自己疎外の客観的構造が説明されるようになるのである。

『手稿』において提起された、自己疎外の歴史的必然性について、『ドイツ・イデオロギー』では次のような形で解明されている。

「一切の矛盾は分業のうちに与えられている。…分業と私有財産とは同一のことを表現する言葉である。ただ同じことが前者においては活動との関係でいいあらわされ、後者においては、活動の生産物に関していいあらわされている。…分業の出現と同時に、われわれに提供されるのは、人間が自然生的な社会のうちにある限り、従って特殊利害と共同利害との間に分裂が存する限り、従って活動が自由でなく、自然生的に分業されている限り、人間自身の行為は彼にとって、いわば外的に対立する力となるということ、すなわち、彼が支配するのでなく、却って彼が抑圧されるような力となるということの、最初の実例である。すなわち、労働が分配され始まるや否や、各人は、容易に抜け出られないような一定の専門的な強制的な活動範囲をもつにいたる。つまり、各人は狩猟者であるか、漁撈者であるか、ないしは、牧人であるか、それとも批判的批判家であるかであり、彼らが生活のために手段を失うことを欲しない以上、どこまでもそうしていなければならない。」（邦訳前掲書、二五頁、前掲叢書『原』二六頁）

「社会的な力すなわち分業によって制約され、いろいろの個人の協働から生ずる倍加された生産力は、この協働自体が自発的でなく自然生的であるために、これら個人にとっては、彼ら自身の結合された力として現われずに、彼らの外に立つ、いわば外的な強制力として現われるのである。しかも、この強制力が何処から来て、何処へ去るのかは彼らの知るところでないから、従って彼らはもはやそれを支配することができない。…哲学者たちにわかりいい言葉で示せば、かうした『疎外』は、いうまでもなく二つの実践的前提のもとに廃棄される。それがいわば『堪え離い』力となり、それにたいして、人々が革命をおこすような力となるためには、それが人間大衆を完全な『無産者』として産出することである。…それと同時に、人間の局地的な生存のうちに存する経験的存在の代りに、人間

の世界史的な生存のうちに在する経験的存在が与えられる生産力のかかる発展が絶対に必要な実践的前提である。」（同書、二七頁『原』三七頁）

「その（『疎外』―筆者）基礎たる私有財産が廃止されるとともに、生産が共産主義的に統制されることによって、人間が自分自身の生産物に対して立つ疎外的関係が撲滅されるとともに、この需要・供給（交換過程）の関係がもつ上述の力は無に帰する。かくて、人間は、交換、生産という人間相互が関係し合う様式をば、再び自分の権限にとりもどすにいたる。」（二八頁、『原』三二頁）

かくて、マルクスは、人間の自己疎外の歴史的性格を明らかにした。つまり、生産力の一定程度の発展段階を規定する分業（自然生的分業と社会的分業をふくめて）が歴史的に成立した過程が、同時に、自己疎外の成立の条件であることを説明している。分業にもとづく、労働生産物の生産と交換が、量的に不平等的な労働および労働生産物の分配となってあらわれ、財産が生れる。妻と子供たちが夫の奴隷である家族のうちにその萌芽が生れ、その意味で奴隷制は最初の財産制である。原始共産社会の解体は、分業にもとづく商品交換にはじまることを解き、原始社会の崩壊が私有制への分解であることを説いている。しかし、商品生産が、社会的分業を必要な条件とするが、十分な条件とはせず、個々の生産者が生産手段を私有し、したがって、生産物を私有物として自由に処理すること、したがって個々の生産者が独立せる私的生産者として相対することを条件としなければならない、ということはまだ明らかにされていない。この点は、『哲学の貧困』さらには『資本論』にまでゆきつかねばならない。

ともあれ、マルクス主義の自己疎外の理論は、ほぼ、これで完成している。人間社会は、分業にともなう労働生産物の交換と私的所有の結合の結果、財産上の不平等をもたらし、階級社会に分裂し、階級対立がつづく限り、人間の自己疎外の構造を克服することはできないということが明らかとなったからである。そこには、自己疎外の歴史性が

論証されている。したがって、疎外を克服するためには、自らの階級を解放することによって階級対立そのものを止揚する階級すなわち自分の労働を売る以外に自ら生活することができない無産者が歴史的に形成されることが必要である。そのためには一定の生産力の発展に規制された資本主義的生産様式が支配的となる社会をまたねばならなかったことも、すでに『ドイツ・イデオロギー』では解明されている。『ドイツ・イデオロギー』にいたって、史的唯物論の諸命題を発展させたいまプロレタリアートは、歴史の発展を規制する生産力の発展に則した客観的性格と結びついた。かくて、プロレタリアートは、自らを階級として組織してゆく過程で、人間を自己疎外から解放する歴史的階級となったのである。

ながながと、マルクスの『手稿』と『ドイツ・イデオロギー』によって展開された、マルクスの初期の自己疎外の理論を紹介してきた。その理由は、ヘーゲルの法哲学の批判を通じて、マルクスがヘーゲルの疎外概念をたくみに国民経済学に適用しながら、史的唯物論に到達した過程を示したかったからである。マルクスが史的唯物論に到達したその思考方法を示すことは、史的唯物論の方法のうちに固有の「基底体制還元主義」的思考方法があるという批判への反論でもあると考えたからである。なぜなら、史的唯物論は、人間社会における自己疎外の歴史的構造を明らかにするための方法論であり、政治の世界を経済に還元させて解釈する方法でないことが示されるからである。現実の政治の世界や、人間の社会的制度および組織の組織化過程が階級社会にあらわれる自己疎外からの解放の過程であるという組織論の前提的方法ともなりうるからである。

マルクスによって追及された自己疎外論と史的唯物論の命題との関連を示せば次のようにいうことができるであろう。

㈠人間的本質の疎外形態には、たんに、商品、貨幣、資本等による経済的疎外形態＝現実的自己疎外があるのみな

らず、神、国家、法などのような宗教的、政治的疎外形態＝観念的自己疎外もまた存在すること

㈡しかも、いまや、宗教的、政治的疎外形態（＝上部構造）と経済的疎外形態（＝下部構造）を区別し、両者の、相互被制約的関係を把握することが問題の核心であること。すなわちこのことは、宗教からの人間解放＝「政治的解放」だけでは十分な解放にならないのであって、政治的な人間解放は、もっと根底的な具体的自己疎外からの解放を必要とすることが明らかにされたこと。この思想方法は、政治的変革の客観的可能性を経済に求めたことを意味する。

㈢そのためには生産力、土台、上部構造の概念の確立なしには、人間の自己疎外の全構造を把握しえないということが示された。土台と上部構造の決定・被決定の関係を解明することは、土台が人間意思とは独立の客観的過程として把握され、その過程の認識を通じて、人間的自由の実現が必然性において把握されることを可能にし、人間解放が主体的にとらえられることを論証することになるのである。

〔II〕 マルクス主義組織論の方法論的前提

かくて、史的唯物論は、プロレタリアートの解放を通じて、主体的に人間を解放するという社会的実践に、科学的な根拠を与えるために、マルクスがプロレタリアートの存在の物質的基礎を追及してきた過程で、社会科学の方法論となった。史的唯物論が科学方法論として強みをもちうるのは、プロレタリアートという歴史的存在が、彼らの階級的特殊的利益の要求をして、歴史的、普通的な要求（＝人間解放）たらしめるという事実にもとづく理論であったからである。しかし、プロレタリアートの解放は、歴史的必然として手をこまぬいて見ているうちに遂行されるものではない。史的唯物論の方法によれば、資本主義的な生産関係は、封建社会の胎内で、自然生的に成長してきたものであるが、社会主義的な生産関係や生産様式は、資本主義社会の胎内では、成長しえないものである。ここに、マル

クス以来のマルクシストが、社会主義への移行にとって、プロレタリア独裁の樹立という、不可避的な課題を遂行しなければならないとした所以があった。つまり、政治的革命を先ずもって果さねばならないとした根拠もここにあった。この点についての議論は省くとして、当面の組織論の方法についての解決を急ごう。

政治革命の遂行に当って、いかなる方法で、いかに組織するかが課題となる。一口でいえば既存の政治権力に対して革命の権力をいかにして組織するかである。『ドイツ・イデオロギー』までのマルクスの追及は、プロレタリア革命の物質的必然性の解明の方向へと、政治から経済への下降的な発展の方向をとり、その分析の過程で史的唯物論の確立へと進んだことは前節でのべた通りである。マルクスの思想方法が、「基底体制還元」でなくて、政治的世界の変革をリアルな問題意議としながら、経済による変革の客観性の証明のための探究であったとすれば、いまや、経済から再び政治への上降的発展の道を辿らねばならない。『哲学の貧困』『賃労働と資本』『共産党宣言』となって、結実していった過程は、まさに、経済学をより精密にしてゆくと同時に、政治的変革の論理を追及したということができる。ここでは、思想史的発展は議論せずに、『ドイツ・イデオロギー』に展開された、プロレタリアートの階級形成の論理が、どう『哲学の貧困』(Das Elend der Philosophie(1847), Marx/Engels Werke, Bd. IV. Dietz Verlag Belin, 1959) に継承されたかの側面に焦点を合せて、マルクス主義組織論の方法を採ることにしよう。

『ドイツ・イデオロギー』で、マルクスは、プロレタリアートの階級の組織と共産主義社会の組織との論理的関係を鮮明に浮ぼりにしている。この際、階級社会における支配階級の論理（既存の社会的制度の組織の論理）に対置して、被支配階級の組織の論理を説いている。ここでもまた、疎外論の適用が見られる。

原始共同体社会において、成員の労働が共同の労働として、成員自らの使用価値の生産であった歴史的な段階では、彼らの協働を介して作られた社会組織もまた彼らの使用価値としてのものであった。この社会では、彼らの労

働の対象化＝外化されたものは、彼らに独立の力となって支配しない。この基本構造は、彼らの協働によって対象化された組織＝共同性も、一つのイデオロギーとして彼らを支配することはない。彼らの人格は組織において保障されていた。社会の共同的利害と個人の利害とは調和していたからである。

しかるに、「分業の出現と同時に、各個人もしくは各家族の利害と、相互に交通し合うすべての共同利害との間における矛盾が生れる。しかも、この共同利害は、『一般的なもの』として、単に表象のうちに存在するがごときのものでなく、分業を行う諸個人の相互的依存として、何よりも先ず、実際に存在するものである。」（前掲訳書、二四頁、『原』二九頁）すなわち分業の発生とともに、個人の行為は、彼にとって、一つの外的に対立する力、強制力となってあらわれ、それが共同の利害として、イデオロギー的な支配的な力をもつようになるというのである。

「他ならぬ特殊利害と共同利害とのかかる矛盾において、共同利害は、国家として、現実の各個それぞれの、また全体の利害から分離せしめられて、一個独立な態容をとる。と同時に、それは『幻想的な共同性』illusorische Gemeinschaftlichkait とし出現するのである。しかし、この際これはつねに、血肉・言語・比較的大規模な分業・その他の利害のごとき、各家族集団および種族集団のうちに存在する諸紐帯―分業によって制約されつつ、すべてこの種の人間集団を通じて対立する結果、（傍点―筆者）その一つが他のすべてを支配することになるような階級関係―の実在的基礎の上に立っているのである。このことから帰結されることは、国家の内部における一切の斗争すなわち、民主制・貴族制・君主制の間の斗争、選挙権のための斗争等々は、階級相互間のいろいろの斗争が行われる際にとるところの幻想的な諸形態に他ならない。」（同書、二五―二六頁、『原』三〇頁）

すなわち、この共同利害は分業をおこなっている個人の相互依存の関係のなかに現実的に存在しており、その客観的な相互依存が社会の共同の意志をうみだし、それが対象化、疎外されて、個人がこれに支配される客観的な意志と

なる。この公共的な客観的な意志は、実は社会の特殊利益からも、現実の共同利害からも独立化する。しかし、その意志は現実から遊離したものではなく、経済的に支配する階級の特種的な利害を一般的な幻想的な利害として、もちこんだものである。この「幻想的な共同利害」の意志が国家意志となって、個人を支配するのである。「この国家意志が法律という一般的な表現をもってあらわれる。」したがって、国家意志の決定をめぐる形態についての斗争は、階級斗争における疎外された次元での幻想的諸形態をめぐるそれであるということになる。

したがって、階級支配の組織・秩序は、被支配階級に包摂された個々人の、外から支配する意志による（分業によって、相互依存化された意志）組織化である。しかも、それは、幻想的共同性という公的イデオロギーをもってあらわれる。「社会から生れて、ますます社会から遠ざかり、独立するにいたる国家」（エンゲルス『起源』）とは、その組織化過程に他ならない。しかし、支配階級の組織化は、同時に自己矛盾をはらんでいる。なぜなら、彼らの人間的関係も物化された力に支配されているからである。その社会に客観的な矛盾のある限り、支配階級の階級意識も、社会の限界が同時に彼らの意識の限界となる。（G. Lukács, Geschichte und Klassenbewusstsein, 1923. SS. 78—79.）彼らは、人間社会の関係が、物化された力となって、それを支配していることを意識することができないからである。

したがって被支配階級は、自らの特殊的利益を、支配階級の一般的幻想的な共同的利益に対置させながら、その幻想的共同性の神秘をバクロしつつ、真の共同利益にもとづく共同性を主張してゆかねばならない。マルクスは次のようにいう。

「分業による諸々の人格的な力（関係）の事物的力への転化（自己疎外—筆者）は、それに関する一般的観念をわれわれの頭脳から払いのけることによって廃棄されうるものでなく、ただ個人がこれらの事物的な力を再び支配するにいたること（疎外からの解放—筆者）によってのみ廃棄されうるものである。しかも、このことは共同体

(Gemeinchaft) なしには不可能である。〔他人との〕共同関係において初めて各個人は、その素質をあらゆる方面にむかって発達させる手段を〔もつ〕、従って、共同体において初めて人格的自由は可能である。」(前掲訳書、七七頁、『原』七四頁)

このマルクスの発想は、ルカーチがのちに、「革命についての抽象的可能性の問題からそれを実現する具体的形態の問題」(G. Lukács, a. a. O., SS. 298—299) の登場をまって、組織論が革命にとって重要な課題となるといったその方法を、すでに示唆している。つまり、革命的主体の組織化過程の問題に連る発想である。そしてつづけていう。

「共同体の従来の代用物において、すなわち、国家等においては、人格的自由は、支配階級の諸関係内で発展した個人にとってしか、かつ彼らがこの階級の個人である場合にしか存在しなかった。従来個人が結合して形づくってきた見せかけだけの共同体は、常に彼らから独立したものであり、それが一階級の結合であったが故に、同時に他階級に対立しており、被支配階級にとっては、全然『幻想的な共同体』であったばかりでなく、むしろ一つの新たな桎梏ですらあった。」(前掲訳書七七頁、『原』七四—七五頁) つまり、支配階級の個人とこれら個人がそのなかに入りこんで生活している共同体との関係は、これら個人がその階級の存立条件(外から規制する事実的力に支配された)のなかでのみ生活してきた限りにおいてのみ、個人として所属した共同体にすぎなく、彼らが個人としてでなく階級成員として参加したところの関係であったということができる。彼らの意志は、階級の存立条件、したがって、かれらの共同体(彼らにとっては特殊利益の追及の場であるが、被支配階級にとっては幻想的共同体である)の存立条件に支配されているのである。これに反して「自己および一切の社会成員の存立条件を自己の統制下におく(自己疎外からの解放—筆者)革命的プロレタリアの共同体にあっては事情は正に逆である。各個人は個人としてこの共同体に参加するのである。各個人の自由な発展と運動との諸条件を彼ら自身の統制のもとにおくものは……他ならぬ個人の結合で

ある。しかも、この条件たるや、従来は偶然に委ねられていたものであり、個々の個人が個人として分裂していたために、また、彼ら個人の必然的な結合ーそれは分業をともなって生じ、個人の分離にとって一つの外的な紐帯となるにいたったーの故に個人に対して独立していた条件なのである。」（同書、七九頁、『原』七五頁）すなわち、革命的共同体の組織、秩序は、各個人の自発性にもとづいた運動として、「幻想的共同性」に対置した、真の共同性としての組織化である。自己疎外からの止揚の論理にもとづいた組織化である。しかし、「真の共同体」として組織化される過程とは、個人を必然的に結合させた紐帯それ自体を、いいかえれば歴史的に規制されつつ組織化されたものを、自ら自覚的に組織化してゆく過程である。マルクスは、ここで、必然性と自由の論理を展開しているのである。組織化された必然の論理の上に立って、自ら組織すべき方向に組織化するという方法である。この論理と方法こそマルクス主義組織論の精髄である。この論理の発展は、国家と革命の論理につながることを次のようにのべて、この『草稿』は終っている。

「プロレタリアは、自己を人格的に主張するために、自分達自身の従来の存立条件にして、また同時に従来の全社会の生存条件たる労働を廃棄しなければならない。それだからこそ、彼らは、従来、社会の個人達が自分達に総体という表現を与えるために採った形態なる国家にたいして、直接的に対立するのであり、自己の人格を貫徹するために国家を顚覆しなければならない。」（前掲訳書八一頁、『原』七八頁）と。

『ドイツ・イデオロギー』では、プロレタリアートの階級の組織と共産主義社会における社会・組織の歴史的論理的関係をあるべき姿として、いいかえれば必然として展開している。しかし、その論理にしたがって、政治権力を奪取するために現実に組織する過程については、いまだ思索されていない。この点『哲学の貧困』では、前進を示している。『哲学の貧困』では、資本主義経済の分析が正確になり、階級斗争の歴史的性格も正しくつかまれはじめてい

る。『哲学の貧困』の最後の節は「ストライキと労働者の団結」と見出しをつけている。そこではイギリスの労働運動の経験から、『ドイツ・イデオロギー』で展開された組織の論理にしたがって、労働者階級の運動の組織化が論じられ、労働者が団結するということの抵抗の意味が具体的に説かれはじめている。

「大産業が、たがいに一面識もない多数の人間の群を一カ所によせあつめる。競走が、彼らの利害関係において、彼らを分裂させる。しかし、賃銀の維持が、すなわち雇主たちに対抗する彼らのこの共通な利害関係が、抵抗という（一つの共通の）思想において、彼らを結集させる、――それが団結である。だから団結は、二つの目的をもっている。すなわち労働者間の競走を中止させ、そうすることによって、資本家にたいする労働者全体の競走をなしとげるようにするという目的をもつ。たとえ、最初の抵抗目的が賃銀の維持にすぎなかったとしても、次に資本家の方が抑圧という思想で結集するにつれて、最初は孤立していた諸団結が集団へと形成される。そして、つねに結合して資本に対決するとき、彼らにとっては、組合の維持の方が、賃銀の維持よりも必要な事実となる。」

「この斗争においてこそ、来るべき戦斗に必要な要素が結合し発展する。ひとたび、この程度に達するや、組合は政治的性格をおびるようになる。」「大月版マル・エン全集四巻、一八八―一八九頁、Marx/Engels Werke. Bd. IV, Dietz Verlag Berlin. 1959 S. 180. 訳文は一部、筆者が改訳している。）

マルクスは、労動運動における、経済主義的斗争から政治斗争への過程における、労働者の運動の組織化過程を事実として展開し、しかも、労働者の日常的利害の要求の組織化と、階級的な組織化との関係をすでに論じはじめているということができる。石田雄氏の『現代組織論』の表現をかりれば、象徴の情動的用法と認識的用法との組織過程の問題が、無意識のうちに意識されている。（石田雄『現代組織論』二一頁、二二頁以下）

そればかりか、次の言葉は、労働者階級の組織化過程における基本的な問題を提起するにいたっている。

「経済的諸条件が、まず、最初に、国民大衆を労働者に転化させたのである。資本の支配は、この大衆にとって、共通な一つの地位を、共通な諸利害関係をつくりだした。だから、この大衆は、資本に対しては一個の階級である。しかし、大衆それ自体にとっての階級ではない。さらに、われわれがその若干の局面だけを指摘した斗争において、この大衆は、自己を相互に結合するようになる。大衆自体にとっての階級 Klasse für sich selbst に自己を形成するのである。大衆の防衛する利害が、階級的利害となる。階級対階級の斗争は一つの政治斗争である。」

(前掲書一八九頁、Masrx/ Engels Werke, a. a. O., S. 181 傍点筆者)

「それ自体としての階級」が「意識された階級」に転化する過程の必然性がとかれている。「プロレタリアート」という純粋な、基底的概念で論じてきたマルクスは、いまや、あるがままの階級意識のない労働者の集団が、階級意識ある集団に転化するという組織過程の問題をするどく意識していることを知ることができる。ここでは、大衆を階級的に組織する社会主義政党の組織成立の可能性の問題と、政党による大衆運動の指導の問題が暗示されているのである。プロレタリアートの即自的な状態と対自的な形態、つまりプロレタリアートの心理と論理の問題の関連性についての課題が提起されている。しかし、『哲学の貧困』でも、まだまだ、プロレタリアートの階級的組織化の形態とその方法というマルクス主義における大衆運動の組織論の課題は意識されていない。あくまでプロレタリアートが階級として組織さるべきであるという歴史的必然性を説いているにすぎない。組織の論理が展開されているだけである。例えば、この書の最後のところで次のようにいっている。

「被抑圧階級は、諸階級の敵対的関係を基礎とするすべての社会の、死活を制する不可欠の条件である。だから被抑圧階級の解放は、必然的にあらたな社会の創造ということをふくんでいる。」

「労働者階級は、その発展の過程において、諸階級とその敵対関係を排除する一つの共同社会をもって、ふるい市

民社会におき代えるであろう。」（前掲書一八九―八九〇頁、a. a. O., S. 182）

この文句は、『共産党宣言』にいう「労働者革命の第一歩はプロレタリアートを支配階級にたかめること、民主主義をたたかいとることである。プロレタリアートは、その政治的支配を利用して、一歩一歩ブルジョアジーからいっさいの資本をうばいとり、いっさいの生産用具を、国家すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、生産力の量をできるかぎり急速に増大するであろう」という、組織化の論理にうけつがれるものであろう。

むすび　―現代組織論の課題―

われわれは、今や、マルクス主義組織論の現代的課題を解決しなければならない時点に到達した。その課題とは、いままでのべてきた、プロレタリアートの組織の論理の承認のうえに立って、プロレタリアートの心理・状態をどう組織化するかという問題である。

レーニンが『何をなすべきか』で提起し、G・ルカーチが『階級意識論』、『組織論』などで展開した課題の新たな追及である。「労働運動の自然発生的な発展は、まさに運動をブルジョア・イデオロギーに従属させる方向にすすませることになる。なぜなら、自然発生的な労働運動とは、組合主義であり、組合主義とは、まさしくブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化を意味するからである。だから社会民主主義者の任務は、自然発生性と斗争すること」「目的意識的に指導し、大衆を階級的に組織化してゆくことである」（レーニン全集五巻、大月書店版四〇六頁）といったこと、また、G・ルーカーチが、「日和見主義は―一言でいえば―プロレタリアの事実的な心理学的な意識状態を、プロレタリアートの階級意識ととりちがえているという点にあるのだ」（G. Lukás, a. a. O., S.86）といった

ことを問題意識の前提として、プロレタリアートの階級意識をどう組織化してゆくかの過程論を、現代社会の条件のなかで追及してゆくことである。この点についての議論はまた稿をあらためねばならない。したがって、マルクス主義組織論は、石田氏のように、レーニン、ルカーチ段階で組織論として自覚されるようになったものでなく、マルクスが追及した論理を方法的前提として、プロレタリアートの心理をどう組織化するかという関連でとらえられねばならない。それは、マルクスからレーニンへの発展として理解されねばならない。本稿は、方法的前提で筆をおいたので、本稿を「マルクス主義組織論序説」と題した次第である。